

と始終を話を一全が夫でやうく解つた様だ然して見れば六之助の非業
な最期を遂たのか氣の毒な事なりと彼一句是一句話し合を最前より隅の
方ふて待消光疑拔館し一人の男篤り聞て立上り不圖思ひ出した用が有つた
親方後刻に又来ませうと言捨戸外へ立出て何處ともあく行たりし開も此男
の何人か追々説分るを聴ねうし然ばまた大岡越前守忠相ぬし山猫三次と
生捕し後渠の熊五郎を首として全類残らむ召捕んと先仲團右衛門に命じ
近國近在を探偵させ又石子傳作に命じて都下の隈々探らむるに石子の心
得全手先を人立多た所へ遣えし夫が手蔓を求るうち或日一人の手先の
者慌忙として立歸り四五日前より吉原へ這入て探りと掛しところ今日髪を
結んとて角町の結髪床で待間し聞た浮世雑談箇様くでいえは殺されたる
因果小僧夫を世話し従弟といふさ、やう屋の主個五郎兵衛如何も怪し
く思ひますれむ此義取敢を中し上ると注進をるに傳作の打聞碯と横手を打
ち鈴が森の事いも昨日餅への有るいば現場に臨きて能見るし渠の彫物

いふも更あり年齡恰好面体まで達磨の長次が白状せし六之助は相違なけれむ彼如何して斯る死と遂たる物かと不審暗を密母詮義をなし、所る开の能き手曼を得たりけり汝の働に賞す可し如何も汝がいふ通り六之助の死骸小依まの其五郎兵衛の舉動こそ最々怪しく思ふあり然ば是より自身に至り身元を篤と探る可しと全心引連傳作の吉原へ行き夫々に探せし所る五郎兵衛が出所采歴詳細あらむ开が面体と年恰好の達磨の長次が中一立し雲霧仁左衛門に相違なればいよ／＼夫と心附然まれば茲へ白黨の出這入なまもなをらむやと尚も探りを掛し所る濱町は住む米屋の主個吉兵衛といふがさきやう屋へ親しく来り五郎兵衛が生得好む圍碁の敵手し夜更る迄も圍みみつ或の泊る事も有と言ふ其奴も怪し、と調て見れば是もまさ長次が白状は相違なき木鼠吉五郎で有しかば備こそ思ふ違えざしと直ふ出仕大岡ぬしに委細の事を演るよなん忠相ぬしの横手を討ち先頃木免權次めが首領雲霧仁左衛門の我支配下は在しといひしが此事ありと思ひ當りぬ今之

是賊の二軒不在ぬ一方先へ召捕は一方必ず落失ん故母團右衛門が此方におらば汝を兩人手分して双方一度に向ふ可けきと仲の生憎此方よをらむ汝一人でふた道へ向えん事の難けきを渠吉五郎がさ、やう屋へ圍碁の勝負お行たる時を計つて其所へ踏込かむ手を濡さむして兩人を召捕んこと易かる可し能くせよと宣告せば石子の委細承まはり其日の至るを待よけり其年を己は文月初旬星祭る夜と成たるに渠の吉五郎の吉兵衛の今日しも例の如くふか一晝の中よりさ、やう屋へ至りて奥の新坐敷に主個と圍碁を爲るたりしが暮合近く成らば庭の面へ水を打せ冷風を呼び碁盤を片寄せ銘酒を猪口へ受ながら主個も水鼠お打向ひコレ吉五郎和主を吾儕もモウ此世は長い正月をあいと思へば今夜の中に高飛して何處か忍んでゐて如何だや言れて水鼠不密の面地コレ首領縁起でもねへ今のお言葉夫よを何う仔細でも。サア賢も今まで隠してゐたが和主も豫て知てゐる因果小僧六之助あれど世話として遣て改心せぬゆゑ詮方なく田舎へ遣たせ女房まで欺さ

置て連出し鈴が森よて殺したのだが其節死骸状海の深水へ打込たりしが流
 れむせす引上りきたが運の盡さ夫らとうく足が附き吾儕の所爲と考附
 たり此ごろ登る客の中よ怪い奴も混つてゐると商賣だけ見取たり
 夫でお主は話をのたと語れど吉五郎は驚かき因果小僧の事にも吾儕も話
 おチラリと聞備の首領があと腹痛をむらした事を考へれば内々業心
 める所ろ反つて夫が仇ふ成り足が附て詮ない事如何も言葉母従つて今宵
 の中お立退ませうと承知したるふ五郎兵衛の女房お竹を爰へ呼び今さら
 ふも面目ないが吾儕は豫々お尋者の雲霧仁左衛門といふ大賊此吉兵衛の吾
 儕の手下木鼠吉五郎といへる者とのより五人男の顔末從弟と偽りし六之助
 が事までん委細話し斯いふ譯ふて有るれば今宵の中は兩人とも此地を立退
 西東別して左右へ落延なん然るを和女が此吾儕は縁が有ては後々の祟の程
 も思たるれば正可の時の用心と書て置たる離縁状と言つ、立く帳簿の抽
 斗を明け取出す一通是状和女が持ておれば生命は障る科目のない茲の道理

を聞譯て今まで結んだ假の縁夢と思つて斷念くれよと流石は名たる賊ほ
 ど在て豫々の覺悟惡びまむ口よ立派母いふ物から意の曇る愛別離苦お竹
 も初て聞たりし本夫の身の上盜賊と知ては大きき驚く物から假令賊母も何
 き何よもあれ數年馴染と累々本夫難に臨きて別る、様お心の毫もあらぬも
 の離縁状を持ち身を全く脱れよかしとい情なき借老の契り全穴とせふいず
 すよ今更再生延よといお情過て恨なきと口説立るを吉五郎頻母論して此吾
 儕も妻子があらば其様よす可けまど有らざるに不幸の中の幸ひり和女も
 首領の妻となり消光一人であるならむ涙を止めて此世の別れに笑ひ顔と見
 せ酒ありと、勵きましても浮ぬ氣を無理よ引立て灯火を照し酒肴を其所へ運
 びけり斯て三人に此世の別れと互に酒を波交しぬ左右する中其夜も己お亥
 の刻の鐘告渡れば然りと計り吉五郎は別れを告てき、やう屋を立出運ぶ仲
 之町の角まで至りし其時豫く手筈や定めけん誰とい知す二三人物の蔭よ
 り顯き出居錠と聲掛赤總の十手を銘々振り閃り、打て掛るよ吃驚し備いと

覺悟の吉五郎も又今更ふ驚きながら先立たる二三人を首をち取て投退ど
 身一寸鐵も帯さきば漸次く増殖する捕人の爲ふ取圍を進退放し谷るう
 へ石母躓き倒れしるば捕人の得たりとをり累り押へて繩を掛しけり然る石
 子傳作の豫々閑と窺ひし今日木鼠の吉五郎が晝よりさ、やう屋に在ると
 知り諸こそ捕人を差向て召捕たりし此上ハイザ五郎兵衛と召捕んと手勢纏
 めて角町の方へとこそ急がせゆく此時其夜も亥刻おれど不夜城といふ芳
 原の系素見がめさの人の賑ひ往き来さ乃中ふての捕物おれは仲の町の上を
 下へと混雑し茶屋遊女の事情をかねむ之れ何事の出来せしぞと驚くまにま
 母客人の入るを斷り出るを止め各自戸を鎖て音を窃め生たる心持もあらざ
 る中さ、やう屋の門口を最荒らか打た、さ仲之町の海老屋から參ありぬ
 お客様の系茲明てと言ども壯者中よりして海老屋さんで誰殿でん今の騷
 動で店を締たまひ今宵にお客にお斷り申しませ。デモ御坐らぶがお馴染の
 系と押返されて否やと言す潛り戸開れば込入大勢御錠くし聲掛て踊り登

るは驚く間もなく姿を更て甲夜の間より客に成つ、登りある捕手の人数も
 をり来り一所に成て奥の間へ路入る体ふ家内の騷動一方あらを見えたるが
 雲霧毫も驚かむ最前戸外で烈しき音を必定木鼠が召捕れしならん我もえや
 是までありと旅人仕度を手早く整へ路金も多く懐中し裏手の方より立退ん
 と爲間もあらむ込入多勢石子傳作夫と見てやアく雲霧仁左衛門己は木鼠
 吉五郎を召捕るに卑怯にも姿を隠し逃んとする繩に掛れと宣告せど雲
 霧今更問答の無益かえと思ひけん腰ある一刀閃りと拔れ前に進し一人を
 空竹割は切倒し反す刀ふ又一人の首を礎と刻しるば此体を見て流石の多勢
 元打驚きて思えむも發と退く隙を計り雲霧床の掛物を片手よ上れば豫てよ
 り修理置けり壁を穿ち一つ穴の有りたるよやと聲掛て飛入つ忽地姿を見
 失むしは備ころ用意有りたるぞ夫續けよと傳作が床を毀ちて進み入る中
 ら暗くて池中は穴あり傳ふて行ば庭面の空井の中は出たるよ必定茲より仁
 左衛門が遁亡するよ相違あるまじ斯まで手筈を定めしもの残念を事してけ

りと悔ども今たそ及ばねば吉五郎のみ引立歸り之も入牢を中一附けお竹を
 呼出し調一所ろ這る故ありて離縁に成り離縁状さへ携へる由申し上り
 祟なきさ、やう屋江戸屋の二軒の家々所せらきて雇人等のみを散々成
 行けり去程に雲霧仁左衛門の修繕置し抜穴より其身を脱き江戸を立退先甲
 州より駿河舟潜み半年餘りの星霜經り翌年四月再度また東海道を江戸へ下
 り鈴ヶ森へと差掛るは因果小僧の六之助を昨年茲にて殺したる事と思ひ
 出られて但見れば死刑場の長臺舟一つの首梟りてあり嗚呼何者の成れの果
 せと瞳を定め能く見れば死顔なる上相合の變りておきど何處やらん洲
 走熊五郎は似てゐたれば不審を起し捨札を讀下まよふん罪跡のことごとく
 記し附け人示すが如かれ 雲霧大さし打驚き如何なればこそ熊五郎は斯
 る最期を遂たるると愁然として立去しが夫より江戸ふ足を止め容子を聞は
 云々と嶋屋の件仇討の話を委數聞得たるは吾儕が社會の己母を殺しを政
 府の手は捕られ或の牢舎或の死刑是皆を天の命する所る争生涯脱れ果可

さ然を卑怯に存命て末に憂恥晒さんより名乗て出て物の美事と處刑を受る
 が増おらめと吐ふ問ひ吐ふ答へ疾くも思案定めかば衣服を繕ひ町奉行所
 へ名乗て出し大岡ぬしの流石名母負ふ大賊不ど有りて天命察し自訴なま
 天晴ある舉動なりと其儘入牢あさしめ于時享保十一年七月十日豫て召
 捕置く木免權次木鼠吉五郎と共江戸中引廻しの上鈴ヶ森に於て磔刑と
 事究まり中舟達摩の長次一人の訴人をなし、功に依死刑一等を免さきて三
 宅嶋へ流されしが幾程もあく彼の嶋にて世に亡き人の數ふ入けり斯て當日
 不成しりば三人の者を傳馬町の牢より引出し町々と巡りて竟母鈴ヶ森の處
 刑柱に括り附け初に木免次に木鼠と刺しり次に雲霧の前へ鎗へ閃かせし
 一槍一突天は歸は「かねて亡き身と思へどなさけなや心母のこる雪と月
 花」と聲朗かき讀了り從容として死し就しに數万の見物叫と計り霎時感
 て止ざりけり斯て三人の死骸をば形の如く晒せしは其夜死骸の前より
 自害し果たる女あり這は是れ雲霧が妻とせしお竹が本夫と死を共みせし

敢あき終りて有りうむ聞もの袖を濡しけて茲は大同ぬいの兇賊全くとびて
 四民やうやく枕を高く寐る状得たるは單に仲石子が働さなりとて厚く恩賞
 を行ひたる忠相ぬいが政談を得意となして口演する春錦亭の柳櫻が漸む筆
 記し編り了りぬ
 記者伊東專三白す本傳の眼目とする名奉行大岡越前守忠相ぬいの明斷英
 才を記せども未だその傳記を詳しせむ是れ之れ最に編輯せし「本町小西
 屋政談」といへる冊子に委しけむるを看客照合して見給はんこと
 を

雲霧五人男全傳了

明治十七年八月二日御届
 同年五月廿六日合本御届
 明治十九年八月廿四日別製本御届
 明治十九年八月 日 出 板

編輯人

東京府平民

伊 東 專 三

東京日本橋區新葎町
 十四番地

出版人

東京府平民

吉 場 清 藏

東京牛込區築土八幡町
 貳番地

發兌元

金 櫻 堂

印刷所

東京金玉出版社
 東京神田區今川小路
 三丁目一番地

東京書林會社役員

京橋區南鍋町

免屋

望月誠

專

日本橋區横山町二丁目

鶴聲社

森仙吉

同 區同町三丁目

金松堂

辻岡文助

京橋區南傳馬町

春陽堂

和田篤太郎

費

日本橋區本石町

明三閣

豐張榮三郎

同 區通三丁目

延壽堂

小林鉄太郎

同 區藥研堀町

文苑閣

鈴木喜右衛門

書

同 區通一丁目

金泉堂

鈴木金次郎

同 區本材木町

自由閣

西村富次郎

同 區小網町

永昌堂

村形吉作

肆

同 區横山町

文事堂

市川路周



